

Title	南京中日文化協会と張資平
Sub Title	Nanjing Chinese-Japanese culture association and Zhang Ziping
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.255- 277
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0255

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南京中日文化協会と張資平

杉野 元子

I はじめに

一九四〇年三月三〇日、汪精衛は南京に国民政府を樹立した。そして同年七月二八日、中日文化協会という組織が南京に誕生する。その後、一九四二年一月に広州分会（成立日は不明）、一九四一年一月二九日に上海分会、一九四一年三月五日に武漢分会、一九四一年九月一三日に蘇州分会、一九四一年一月二日に杭州分会、一九四二年一月一六日に徐州分会などと各地に分会が次々と設立され、さらには分会の下には支会も作られ、日本占領地域に網の目状に広がっていった。

この協会については、現在までのところ上海分会を対象とした研究が進められている。一九四四年六月に上海へ渡つた武田泰淳は中日文化協会上海分会に付設された東方文化編訳館に勤務するが、のちにその当時のことを回想して小説『上海の螢』（『海』第八卷第二号、第四〜九号、一九七六年二月、四月〜九月連載）を書いた。高橋正は「上海・一九

四四——武田泰淳の場合」の中で、『上海の蜚』に登場する中日文化協会上海分会関係者が誰をモデルとしているのかを特定し、『上海の蜚』は事実比較的忠実に書かれていることを明らかにした⁽¹⁾。また、高橋正「『上海の蜚』と中日文化協会」には、中日文化協会上海分会の規約全文が付録として掲載されている⁽²⁾。さらに今年に入り、大橋毅彦・趙夢雲『上海中日文化協会研究・序説——現地新聞メディア掲載の協会関連記事一覧——』が刊行された⁽³⁾。この冊子には、『大陸新報』、『新申報』両紙に掲載された中日文化協会関連記事の見出しが一覧表となつて並べられている。『大陸新報』、『新申報』はともに上海で発行された新聞であるため、その記事の大半は上海分会関連であるが、この一覧表を参照することにより、上海分会を中心とした中日文化協会の動向を時系列でたどることが可能になつた。

本稿では、これらの研究成果を踏まえたうえで、新たに南京の中日文化協会総会について、その組織と活動実態を調査して明らかにする。また南京中日文化協会には、著名文学者張資平が関わつていた。張資平は中日文化協会が発足する候補理事のポストに就き、協会発行の雑誌『中日文化』の編集長を務め、この雑誌に複数のペンネームを使つて論文、小説、翻訳を発表した。しかし近年作成された松岡純子「張資平研究資料〔2〕 文献目録⁽⁴⁾」や徐仲佳「張資平著訳年表⁽⁵⁾」では、『中日文化』誌上の張資平関連文献はごく一部が挙げられているにすぎない。そこで本稿では、『中日文化』に掲載された張資平関連の文献をすべてピックアップし一覧を作成する。そしてその内容を検討することにより、これまで知られていなかった『中日文化』編集長時代の張資平の側面を明らかにする。

II 南京中日文化協会

(一) 組織と活動の概要

一九四〇年七月二八日、南京の東亜クラブにて、五百名余りが参加して中日文化協会成立大会が挙行された。発会式では、まず外交部長褚民誼が開会の辞を述べ、次に国民政府主席代理汪精衛と中華民國派遣特命全權大使阿部信行が訓辞を述べ、さらに興亜院華中連絡部長官津田静枝が祝辞を述べた。当日発表された理事名簿によると、名誉理事長は汪精衛、阿部信行の二名、名誉理事は陳公博、温宗堯、王揖唐、梁鴻志、朱履齋、顧忠琛、周仏海、梅思平、徐蘇中、高冠吾、諸青来、趙毓松、繆斌、津田静枝、児玉謙次の一五名、理事長は褚民誼、常務理事は陳群、趙正平、傅式説、林柏生、船津辰一郎、日高信六郎の六名、理事は江亢虎など一二名(内日本人二名)、候補理事は夏奇峯など一三名(内日本人二名)、監事は嚴家熾など三名(内日本人一名)である。⁽⁶⁾

中日文化協会発足の経緯について、『大陸年鑑昭和十六年民国三十年版』は次のように書いている。

同会は文化の東亜新秩序——日支提携、善隣友好、共同防共の三原則を基調としこの線に沿つて日支文化及び思想の交流を図り以て東洋文明の精華を世界に発揚せんと目的から、最初支那側の国民政府主席代理汪精衛を始めとし褚民誼、林伯生、傅式説、趙正平、諸青来の諸氏から自発的に提唱され日本側の阿部大使を始め、大使館、興亜院が全幅的に賛意を表し、遂に、七月十一日の国民政府行政院會議で協会組織が決定され、続いて同月二十八日に南京で盛大な発会式が挙行された。⁽⁷⁾

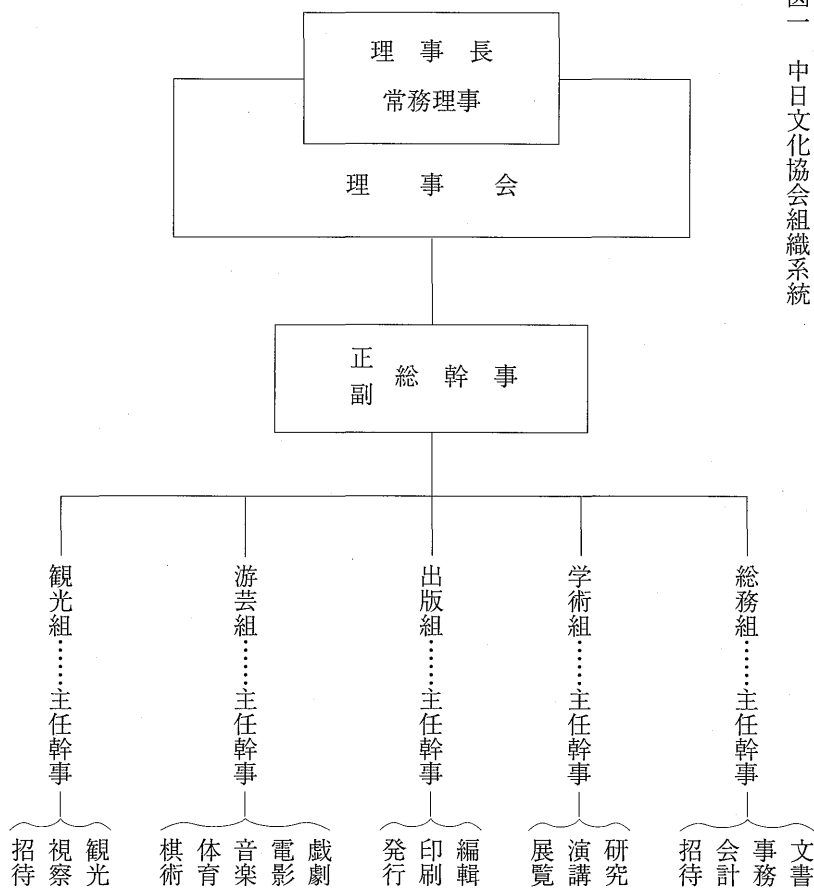
中国側が「自発的に提唱」し、日本側が「全幅的に賛意を表し」たと書かれているが、理事名簿を見ても明らかでない、すべての役職に日本大使館や興亜院の要人が名前を列ねている。また南京総会の收支については不明であるが、上海分会の一九四一年度收支報告を見ると、収入合計一六六七四元のうち、興亜院がその約四分の三にあたる八九六七四元、上海市政府が二七〇〇〇元を負担している。⁸⁾このことから、中日文化協会は、日本政府の強い後ろ盾を背景とした機関であり、日本側がその活動に厳しい監視の目を行き渡らせていたことがわかる。

中日文化協会の規約には、事業内容として「(一) 文芸学術講座及講演会ノ開催 (二) 各種著作翻訳物ノ刊行 (三) 学術ノ聯合研究 (四) 文化展覧会ノ開催 (五) 図書ノ交換 (六) 図書館博物館美術館等ノ設立並ニ協助 (七) 研究員ノ相互派遣 (八) 語学ノ相互伝授及奨励 (九) 音楽戲劇美術映画ノ相互紹介並ニ研究 (十) 体育運動ノ共同發展 (十一) 相互観光視察ノタメノ旅行視察団ノ組織 (十二) 学者芸術家ノ相互紹介並ニ招待 (十三) 東亜文化ノ研究並ニ宣伝 (十四) 其他中日文化事業ノ共同遂行」の一四項目が挙げられている。⁹⁾

次に、中日文化協会の組織を図一に示す(次頁)。¹⁰⁾

事業内容と組織系統図を見てわかるように、その活動は実に多彩で多方面にわたっている。本稿では、これらの活動を一つ一つ紹介する紙幅はないので、中日文化協会の最大イベントである全国代表大会の模様と中日文化協会の柱となる出版組の活動の二つに絞って紹介する。

図一 中日文化協会組織系統



(二) 全国代表大会

第一回全国代表大会は、一九四二年四月二日から二三日まで漢口で開催された。参加代表は、南京總會五名、上海分会三名、蘇州、杭州、広州分会各二名、華北文化機関代表三名、武漢分会五名の合計二二名である。大会では總會及び各分会が四四件の議案を提出し、二件が撤回、二件が保留、それ以外は承認された⁽¹⁾。主な議決事項は、①中日間における教授学生との交換、②東亜文芸復興運動展開促進のための具体案、③和平地区内における大学の復活、④和平地区内における図書館の復活、⑤東亜体育競技（オリンピック）の開催、⑥中日文化界交換使節団の実施、⑦中日文化賞の設定、⑧各県に文化協会支部を設けること、⑨毎年定期的に大会を開く、⑩文化協会派遣の慰問団を組織して皇軍及び南方華僑を慰問する、⑪毎年四月二十一日を文化日と定める、⑫貧窮学生に対する奨学資金の交付、などである。臨時動議として、新国民運動並びに大政翼賛運動の平行的な促進研究組織を總會内に設けることが決議された⁽²⁾。

第二回全国代表大会は、一九四三年四月一日から三日まで南京で開催された。参加代表は中日文化協会總會三〇名、上海分会五名、広東分会一名、蘇淮分会三名、武漢分会五名、江蘇分会五名、無錫支会一名、安徽分会四名、安慶分会三名、浙江分会四名、山東省代表二名、河北省代表二名、北京代表五名、天津代表二名、蘇北分会三名、日本文化団代表一四名である。日本文化団の顔ぶれは、池崎忠孝（代議士）、武者小路実篤（小説家）、河上徹太郎（大日本文学報国会）、谷川徹三（法政大学教授）、塩谷温（東京名譽教授）、足立原八束（塩谷博士秘書）、谷口吉彦（京都市大経済学部長）、佐藤武夫（早大教授）、山崎靖純（山崎経済研究所長）、信時潔（東京音楽学校教授）、大串兔代夫（国民精神文化研究所）、斎藤响（東洋大学教授）、平沼亮之（日本体育会貴族院議員）、小山（平沼貴族院秘書）である⁽¹⁾。

主な議決事項は、①日華陣歿将士、罹災民英靈供養塔の建設、②科学の研究増進のため文化奨金制度の設定、③学

術奨励金の設定、④日華両国語の勉学奨励金制度を設け両国文化の溝通に資する案、⑤日華文化溝通に関する顯著な史蹟を調査する、⑥毎年日本語演説大会を開催、⑦国府へ国立戯学院キョクゲンの設置を建議し固有芸術の發揚と戯劇界人材の養成を図る案、⑧東亜文化建設會議の招集、⑨日華両国作家が相互に古典作品を翻訳紹介し両国文化を紹介する、⑩大東亞史の編纂、⑪第二次全国美術展覽會の開催、⑫日華文化人名録の編纂、⑬日華両国の児童教育専門家並に婦人界代表會議を開き戦時下児童教育方針を樹立する、などである。¹³⁾

大会期間中の四月二日午後、中日文化代表懇談會が開催されたが、席上、広東代表林朝暉の發言が波紋を広げた。河上徹太郎は、「我が国は明治維新以来、欧米文化との戦いの日々を過ごしてきたが、このことは中国にとって参考になるであろう」と發言する。また谷口吉彦は、「東亜では、我々とともに英米を撃滅する戦線に立っている。文化運動は戦争運動であり、思想戦争である、文学、学術、芸術及び各方面の思想戦争である」と發言する。このように日本側は、戦争完遂のためには、文化運動を盛んにして、英米との思想戦争に勝たねばならないと主張する。しかし林朝暉は、「英米勢力を如何に撃滅するかということについてだが、我々中国と日本とともに東亜の大国である。日本は明治維新以後、迅速に進歩し、すぐに英米の勢力を撃滅した。しかし我々中国は英米経済の圧迫、思想の脅迫を受けたため、一部の人民は、生活問題以外、思想や文化が何であるかなど知りもしない。〔中略〕『衣食足りて礼節を知る』と言われているが、真つ先に解決しなければならないのは、人民の生活問題である。日本は思想が環境を支配しているが、中国は環境が思想を支配している」と反論する。この林發言に対して、山崎靖純は、「先覚者たちが、一般人の思想を覚醒させなければならぬ」と応じ、谷川徹三は、「中国の思想は安穩な暮らしのみを求めているが、このような思想は問題である。〔中略〕我々はこのたびの戦争の意義を徹底的に理解し、勝利に向かって邁進することを決心しなければなら

ない」と応じる。また武者小路実篤は、如何に人民の生活問題を解決するかという点に関して、「堯舜でさえも解決できないのだから、数千年後は恐らくもつと解決が困難であろう。私は小説家で、空想家であるが、新秩序の建設に対しては、中日両国が協力して邁進してほしい」と述べた。

大会終了後、『朝日新聞』に「中日文化大会を顧みて」という特集が組まれるが、そこに文章を寄せた三名の代表のうち、谷川徹三と武者小路実篤はともに、林発言をめぐる応酬を紹介し、谷川徹三は「この懇談会はすくなくともわれ／＼にとつては、この会議を通じて最も実質的な会であつた⁽¹⁵⁾」とし、武者小路実篤は、林発言が「印象に残つた⁽¹⁶⁾」と書いている。

日本文化団は、大会期間中、文化人や政治家と交流したり、名所旧跡を観光したりしたが、中国各地を移動するときには、否が応でも土地や生命を奪われ、塗炭の苦しみをなめている中国民衆の姿が目に入ったであろう。したがって彼らにとつて林発言は、その場で反論はしたもの、重い一撃として受け止められたのだと思う。武者小路実篤は、随筆「支那旅行」（一九四三年七月）の中で、再び林発言に触れて、「この考は、支那の現状に即した考へ方であるから、一概に理屈で否定してすましてはゐられない、生活の問題を解決することが思想の重大任務である」と書いている⁽¹⁷⁾。

第三回全国代表大会は、一九四四年四月五日より上海で開催予定であつたが、実際には開催されずに終わった⁽¹⁸⁾。

(三) 出版活動

中日文化協会発足後半年ほどたったころから、総合雑誌『中日文化』（一九四一年一月創刊）、翻訳雑誌『訳叢』（一九四一年二月創刊）、日本語版『中日文化』（一九四一年三月創刊）と定期刊行物の創刊が相次ぐ。また不定期刊行物と

して、学術叢書、青年叢書、日本文化小叢書の出版も開始した。しかし『中日文化』第二卷第二期（一九四二年三月）掲載の「出版組工作概況」によると、『中日文化』は月刊誌であるが、日本語版を出版する関係から実際には隔月刊となっていた。また日本語版『中日文化』は三期出版したあと経費の関係から停刊した。さらに一九四一年三月から一九四二年二月までに、学術叢書十一種、青年叢書二種、日本文化小叢書五種を出版したが、その後は予算減少、印刷費高騰などの関係から、出版が滞り原稿がたまっていった。¹⁹このように出版事業は一九四二年三月の時点で早くも大きな困難に直面していたが、一年後には状況がさらに悪化する。『中日文化』第三卷第二・三・四期（一九四三年四月）掲載の「出版組工作報告」によると、物価上昇と経費不足により叢書の出版も停止した。また一九四三年二月、紙の配給がストップしたため、紙価が跳ね上がり、同時に印刷代や原稿料も値上がった。したがって『中日文化』さえも出版が困難になり、いろいろ算段して、第二・三・四期合併号と第五・六・七期合併号を発行することにした。²⁰

『中日文化』はその後、第三卷第八・九・一〇期合併号（一九四三年一月）、第三卷第一・一二期合併号（一九四三年一月）、第四卷第一期（一九四四年三月）を出版して幕を閉じる。一方、『訳叢』月刊は、一九四一年二月から一九四二年二月まで、毎月欠かさず刊行された。しかし一九四三年度は二度の合併号を含めて計十冊、一九四四年度は二ヶ月ずつの合併号を計三冊発行し、六月に停刊した。

III 『中日文化』編集長時代の張資平

張資平が日中戦争時期に「和平運動」に関わり、汪精衛政権に協力していく過程については、鄂基瑞・王錦園「人生的失敗者——張資平」（復旦大学出版社、一九九一年）、森三千代「日中戦争下の張資平——『和平運動』への参加過程

——『野草』第五六号、一九九五年八月）、顔敏『在金錢與政治的漩渦中——張資平評伝』（百花洲文芸出版社、一九九九年）の中で詳しく跡づけられている。これらを参考にして、張資平が中日文化協会に関わる前後の状況について、簡単にまとめる。

一九三八年三月、南京に維新政府が成立した際に、張資平は、内政部長の陳群から教育部長に誘われるが断つた。しかし一九三八年七月二六日、日本政府によって設立された「対支特別委員会」は、汪精衛を中心とする新政権樹立を目指して人材集めをおこない、張資平もそのターゲットとなる。そして一九三八年十一月、香港に滞在していた張資平は、香港総領事の中村豊一から酒席に招かれ、旅費と称して二百香港元を渡される。

一九三九年一〇月、上海の副領事岩井英一によって興亜建国運動本部が上海で設立され、張資平は文化委員会主席となる。一九四〇年二月一六日、張資平は記者会見の席上、興亜建国運動本部同人を代表して、「われわれの理想は新中国の建設と亜細亜を興すことは不可分にして一体のものであり又新中国建設は日本との提携によるべきだと確信し中国の同志を糾合して興亜建国の運動を起したのであつて日本の同憂の人士と協力して一層理想に向つて発展したい」と発言するが、その翌々日には、重慶中央放送局がすばやく反応し、張資平のことを漢奸と批判した。

一九四〇年三月三〇日、汪精衛国民政府が発足し、張資平は農鋳部技正となるが、ほどなくして農鋳部は解散する。一九四〇年七月、中日文化協会が南京に設立されると、候補理事一三名の中の一人に選ばれ、一九四一年一月からは中日文化協会出版組主任として、『中日文化』の編集を任される。一九四二年二月、中日文化協会出版組主任を辞し、行政院文物保管委員会研究員となるが、一九四四年一月には官職を辞し、上海に戻る。そして上海芸術大学文学系主任となり、やがて終戦を迎える。

さて、本節では、『中日文化』編集長時代の張資平に焦点を絞り、彼が『中日文化』に発表した文章を検討する。鄂基瑞・王錦園は、『中日文化』の性格を、「日本帝国主義軍事侵略行動に歩調を合わせて文化侵略をおこない、植民政策世論を形成し、民衆の耳目を惑わす」ものであるとし、この雑誌に掲載された張資平の文章については、「たとえ科学訳文の類であっても、漢奸の臭気をまき散らしている」と厳しく批判している。⁽²⁾ また森三千代は、『中日文化』誌上の張資平の文章について、「そのほとんどが、日中の協力によつて、中国の科学技術、農業技術、医学などを発展させようという意図をもつて書かれたものであった」としている。そして張資平は「和平運動」に踏み入つてから、「特に日本の科学技術の導入について、饒舌なほど多くの意見や提案をしている」が、それは「自分が『和平運動』に参加していることを正当化し、自身の精神的安定を図ることにもなつた。この件に関して、彼が饒舌であるのは、日本の科学技術をとり入れることが、中国の発展にとつて重要だといふ確信があつたためだけでなく、『和平運動』参加に対する後ろめたさの裏返しであつたのだともいえるだろう」と書いている。⁽³⁾

しかし果たして張資平は、鄂基瑞・王錦園の指摘するように、『中日文化』誌上に、漢奸の臭気がただよう文章のみを発表していたのであろうか。また森三千代は、「和平運動」参加後の張資平について、日本の科学技術導入について饒舌に語ることにより、「和平運動」に参加している自分の精神安定を図つたとしているが、果たして『中日文化』編集長時代の張資平は「和平運動」に唯々諾々と従つていたのだろうか。

前述したように、近年、張資平の著訳目録が二編作成された。松岡純子「張資平研究資料〔2〕 文献目録」(二〇〇一年)は、張資平が『中日文化』に発表した文章として「關於中日文化提攜」、「折柳」、「日本第一流学者為何不來華講学」の三編を、翻訳として「憶東洋之巨星——新城博士」の一編を挙げている。また徐仲佳「張資平著訳年表」(二〇

○二年)は、張資平が『中日文化』に発表した文章として「折柳」、「日本第一流学者為何不來華講學」、「東洋ノ巨星——新城博士」の三編を挙げている。²⁴⁾しかし実際には、張資平は『中日文化』に、自作、翻訳合計して一五編の文章を発表している。それらを内容別に分類すると以下のようになる。

【論文】

張資平「關於中日文化提攜」(第一卷第二期)

星海「關於中日之學術提攜」(第一卷第三期)

張星海「論介紹日本學術」(第一卷第四期)

張声「日本第一流学者為何不來華講學」(第一卷第五期)

【小説および小説の序文】

鷗音「折柳」(第一卷第二期)

望歲小農「『新紅A字』自序」(第一卷第五期)

【翻訳】

能田忠亮著、星海訳「東亜新秩序與曆法改正」(第一卷第一期)

木内信藏著、張資平訳「北京的都市形態」(第一卷第一期)

鷹取武夫著、張星海訳「蘇聯之日本學研究」(第一卷第二期)

保柳睦美著、張資平訳「華北蒙疆之氣候變化與年輪分析」(第一卷第三期)

荒木俊馬著、張資平訳「天上の文字和大宇宙の書籍」(第一卷第五期)

荒木俊馬著、張資平訳「万有引力定律和太陽系的鳥瞰」(第一卷第六期)

著者名なし、張声訳「憶東洋之巨星——新城博士」(第一卷第六期)

渡辺幾治郎著、張資平訳「明治維新之黎明及其特質」(第二卷第二期)

長尾巧講述、張資平訳「地質時代之生物變遷及興亡」(第二卷第三期) *講演原稿を翻訳

これらの中で筆者が注目するのは、三編の論文である。まず「關於中日文化提攜」であるが、この文章の中で張資平は次のように書いている。

私はいつも言っている。東亜新秩序、東亜聯盟、東亜協同体は確かに最も崇高な理想と標語である。しかしそれは譬えて言うならば高等数学、微分方程式あるいは少なくとも二乗の掛け算である。中国の大多数の労働者や農民——現代のカルメン——はまだ加減乗除の四則練習問題さえもままならないのである。悲しいかな！／都市の労働者や農村の貧乏人は、街角に氾濫している宣伝小冊子や壁の標語によつて飢えを満たしたり、寒さを防いだりすることができない。小冊子や宣伝品の発行者は同時に読者を兼ねる。標語を貼る職員は同時に見物人を兼ねる。その他の貧苦にあえぐ大衆は微塵も関心を示さない。しかし、中日問題を解決する主人公は、洋館の奥にいる高官ではなく、これらの貧しい大衆である。我々は彼らの文化に注意を向け、いつも彼らの生活を心に掛けなければならぬ。²⁵い。

次に「關於中日之學術提攜」であるが、この中には次のような一節がある。

先日文化座談会で文化工作について語ったときに、アメリカの中国に対する経済侵略には反対するが、アメリカの文化工作の技巧については敬服させられると述べた。庚子賠償金で清華大学を設立し、留学生を派遣したといつた大計画については、誰もがよく知っていることなのでここでは触れない。もつとも敬服させられるのは、あの宣教師たちの文化工作の精神である。／〔中略〕彼らは決して毎日青年たちに聖書やキリスト教の教義を注ぎ込んでばかりいたわけではない。彼らは七日間のうち、一日だけ聖書を講義し、その他の五日間は、貧民を救済し、婦女子を教育し、科学知識を最も優美な贈り物として中国青年に与えた。彼らが当時苦心慘憺して育んだ精神は、五十年後の今日、実りを結んでいる。事實は歴然としており、否定には及ばない。／東亜新秩序、中日文化提携、東亜聯盟などのスローガンや理論は誠に美しく善である。しかしすべてひつくるめても、今日の聖書にしか該当しない。毎日若者に聖書を熟読させれば、彼らははしまいに飽き飽きして欠伸をするに違いない。彼らは、文化面、学術面で、ほどよく満たされることを希求しているのである。蛋白質はもとより最も優れた滋養品である。しかし毎日鶏や卵を食べ、その他の食物をまったく摂取しなければ、身体にとつて無益である。／今日耳にするのは、かまびすしい聖書の朗読と宣伝である。目にするのは太鼓をたたいたパレードばかりである。青年はこのことに対してきつと嫌気をさす日がやってくるであらう。²⁶

張資平はこの後さらに、中国の青年は、「近衛や松岡には異常に冷淡であるが、厨川白村や長岡半太郎を尊敬している」とし、日本側に、政治的スローガンを叫ぶのはほどほどにして、学術の面、とりわけ日本が進んでいる自然科学の

分野において、中国に貢献することを期待すると述べている。

次に張資平は「日本第一流学者為何不來華講學」の中で、一流の日本人学者が中国に来て講演をしないことを批判している。

アメリカ当局と民間は、中国に対して、中国人はいかにアメリカと親善しなければならないか、いかにアメリカの教育制度を模倣しなければならないか、などといった計画的な宣伝をおこなったことは一度もない。しかしデューイが胡適博士の紹介で北京大学に来て講演をおこなってからは、デューイの教育哲学の論文とそれに関する討論などの出版物は、洪水の氾濫のように、街頭にあふれるようになった。文化学術上、当時偶像崇拜を求めた中国青年たち——今日の中国各界の中堅分子——はみなアメリカにあこがれるようになった。「中略」／上述のことから明らかのように、一千匹の青竹蛇（全身緑色の毒ヘビ）の宣伝は、一匹の龍の学術講演に及ばない。日本側がもしこのままの政策、すなわち、ジャーナリストが横行するのに任せたり、本当の話をしない太鼓持ちの政客が闊歩するの^②に任せたりする政策を踏襲していくのならば、中日間の文化交流学術提携は、百年河清を俟つがごとしである。

張資平は中日文化協会出版組主任として、『中日文化』編集長の仕事を創刊号（一九四一年一月）から第二巻第一期（一九四二年一月）までおこなうが、一九四二年二月二五日に出版組主任を辞する。そして後任として高齊賢が出版組主任となり、『中日文化』編集長の仕事も引き継いだ。高齊賢は、新しい編集方針を打ち出すが、小説については、「男

女の愛情、社会の悪にいたっては、たとえ描写の上では十二分なものであらうとも、みだらな行為や犯罪をおおることとなるので、本刊は一切採用しない⁽²⁸⁾という基準を設けた。この一節は、『中日文化』に他の作家が書いた恋愛小説だけでなく、自作の恋愛小説「折柳」も掲載した前任の編集長張資平を念頭において書かれたのであろう。

また高齊賢は、学術論文の採用基準についても、「本刊の発行対象は、中日両国の社会全体、民族全体であり、高尚な学者や専門の研究者ではない。よつて本刊が必要とする原稿は、多方面の精緻な学術研究を歓迎するが、一般読者の興味を考慮しないわけにいかない⁽²⁹⁾」と書いているが、この一節も鋒先を張資平に向けていると思われる。東京帝国大学理学部地質学科を卒業し、理科系の専門知識が豊富な張資平は、「専論」をさらに「社会科学」と「自然科学」の二つに分け、自然科学の難解な論文を多数掲載した。しかし高齊賢が編集長となつてからは、「専論」を小分けせず、しかも自然科学関係の論文は激減した。恋愛小説や自然科学関係の論文は、「和平運動」と一番距離を置いたものである。張資平がこのような作品や文章を積極的に掲載しようとしたことが、上層部の反感を買つたことは間違いない。しかし張資平が出版組主任を辞した最大の理由は、前述したように、張資平が『中日文化』誌面を使って、大胆にも日本側の政策を痛烈に批判したため、何らかの圧力が加つたからではないだらうか。

出版組主任を辞めた張資平は、行政院文物保管委員会研究員となる。その後一九四四年一月、官職を辞して上海に向かい、上海で終戦を迎えるが、一九四八年三月二〇日、国民党上海高等法院に漢奸罪の嫌疑で召喚される。張資平はその日のうちに北京大学校長胡適に助けを求めると手紙を書くが、その手紙に付された「我之辯明」には、次のような一節がある。

私は南京でしばしば偽政府と敵方を諷刺し諫める文章を発表した。敵方は大いに怒り、敵の憲兵が何度もやって来て尋問し、すんでのことで筆禍事件を引き起こすところだった。友人の陳柱尊氏は、敵の外交文化当局と憲兵隊が私の態度に極めて不満を抱いていると告げ、適当にあしらわなければならぬ、そうしなければ不測の事態を招くと警告した。便衣服の憲兵はしばしば訪ねてきて、重慶の友人の消息（たとえば郭沫若や黄琪翔などの近況）を聞くことにかこつけて尋問したので、途方に暮れてしまった。陳柱尊氏は私を博物委員会委員に招聘しようとしたが、私が拒絶したため、私の同意を得られぬまま、先に発表した。（この委員の報酬は毎月百元である。私が同意することなどあろうか。おおかた日本側の差し金であろう）。／＼ついに日本の瀧庸博士が、私の窮状に同情し、また敵方の私に対する無礼に反対し、調停に乗り出した。私はやむを得ず、私人の資格で博物院のために岩石と鉱物の標本整理をおこなった。³⁰

従来の研究では、「私は南京でしばしば偽政府と敵方を諷刺し諫める文章を発表した」というのが具体的にどの文章を指すのか明らかになっていかなかったが、おそらく本稿で紹介した『中日文化』誌上の文章でないかと思われる。すなわち「我之辯明」のこの一節は、獄につながれるかどうかの瀬戸際に立たされた張資平が罪を逃れたい一心で捏造したまったくの出鱈目などではなく、そこにはなにがしかの誇張やねじ曲げはあるかもしれないが、ある程度真実に近かったのではないかと判断する。

張資平は出版組主任辞任後、黙々とただ化石や鉱物の標本整理に打ち込んでいたわけではなく、汪精衛政権に迎合的な文章を数多く書いた。³¹したがって一九四二年五月、毛沢東は「在延安文艺座談会上的讲话」の中で張資平を周作人と

ともに名指して漢奸文人と批判したが、現在でも中国ではその評価は揺らいでいない。⁽³²⁾ しかしたとえ一時期であったとしても、張資平が『中日文化』編集長時代、「和平運動」に対して批判と抵抗の姿勢を示していたことは看過されるべきでない。

IV おわりに

張資平は一九四八年四月、一年三ヶ月の有期徒刑の判決を受けるが、控訴を続けるうちに、国民党から共産党への政權交替にともなう混乱の中で裁判はやむやみとなる。一九四九年、中華人民共和国が建国されてからは、自然科学の書籍の翻訳をしたり、補習学校で地理の教員をしたりして、糊口をしのぐ。一九五五年六月、上海市公安局により逮捕され、反革命罪、漢奸罪に問われ審査される。そして一九五八年九月、上海中級人民法院にて二十年の有期徒刑の判決を受け、一九五九年一二月、安徽省の労働改造農場で病死する。六六歳であった。

北京の周作人も、中日文化協会と関わった。周作人は、複雑な事情があったにせよ、⁽³³⁾ 北京華北政務委員会と南京汪精衛国民政府に抱き込まれ、官職に就き、「和平運動」の泥沼にずるずると引きずり込まれていった。一九四四年一二月には、中日文化協会華北分会理事長に就任する。しかし、上海ではもう一人の著名文学者陶晶孫が中日文化協会と関わりをもつが、最後まで節を守り通した。自然科学研究所員であった陶晶孫は、一九四四年七月に中日文化協会上海分会総幹事に起用される。武田泰淳は一九四四年六月に上海へ行き、同年六月一日に設立された東方文化編訳館に勤務するが、「文化協会と編訳館は、フランス租界の童話風の、御殿のような建物に同居して」⁽³⁴⁾ いた。そしてある日その建物の中で、陶晶孫を訪ねに来た張資平を目撃する。『上海の蜩』に次のような場面が描かれている。なお文中の「T氏」

は陶晶孫を、「東方文化協会」は東方文化編訳館を指す。

T氏は日軍占領下の上海で、ときたま目立たない短いエッセイを発表していた。／昔日の文学青年の情熱は忘れてはてているにせよ、文学者らしい感情のこまやかさは充分に残っていた。いまは九州大学で勉学した衛生学は役立っていないのだから、中国文にも日本文にも達者な貴重な文化人として、東方文化協会の理事に名を連ねているのだ。／「創造社」の有名な同人が、一人だけまだほかに上海に残っていた。かつては華々しく文名をあげ、作品数も多い張資平が、いまは何をやつて生活しているかは不明だったが、事務所に訪ねてきたことがあつた。大恋愛小説など、さかんに書きとばして読者も多かったのに、その張資平は、いかにもうらぶれて生き残りらしい感じ(35)で事務所にあらわれた。／彼は派手な服を身につけていたし、血色もよかつた。肥満してもいた。だが、彼の心中がうらぶれたものであることを、私はすぐ察した。日本の小学校校長のような地味な灰色の服を着た、痩せたT氏は、昔の友人にやさしく接していた。彼と二人だけの話も、ねんごろだつた。／私は二人の相談を、なるべく聞かないようにしながら「どうして、あの有名なチャンツウピンが、こんな具合のわいことになつたんだろう」と、ひそかに考えていた。私以外の職員は、彼の来訪など、気にもとめてはいなかつた。彼は、日本側からも、中国側からも、すでに忘れられかかつた存在だつた。抗日戦線からは軽蔑されていたし、占領地区内でも重要視されていなかった。

張資平は、一九四二年二月、出版組主任を辞したが、中日文化協会と縁が切れたわけではなく、第二回全国代表大会

にも候補理事の肩書きで参加している。また一九四五年一月には、陶晶孫総幹事の発案により、上海分会に「現地学術文芸方面の日華権威者を集めた」学術委員会が結成されるが、張資平はその委員に名前を列ねている。⁽⁵⁾張資平は一九四四年一月、南京で同棲した女性を連れて上海の自宅に戻り、正妻と愛人、そしてそれぞれの子供を多数抱え、生活の負担が重くのしかかっていた。陶晶孫はこのような友人を見かねて、学術委員会委員になるよう声を掛けたのかもしれない。

陶晶孫も、周作人や張資平と同様に、日本占領地区に暮らす知日派著名文学者として、当然ながら日本側から厳しくマークされ、「和平運動」推進の旗振りをするように、硬軟合い混ぜた方法によって迫られたであろう。しかし毅然とした態度を貫き、汪政府や日本側に不必要に媚びるような発言は一切おこなわなかった。そればかりか、時には傍若無人に振る舞う日本側に苦言を呈し、冷水を浴びせたこともある。陶晶孫は、武者小路実篤宛公開書簡（一九四三年一月三日）の中で、次のように書いている。

あなたは太へんお若いやうです。大変中日のために大東亜のために骨折つていらつしやいます。私はとても臆病でそれどころではありません。尤もあなた、勇敢でしたら私は重慶派に唾をかけられ南京の人には泥をぬられ日本の方にはさしあたり自警団につかまります。／あなたは、日本と中国とは決して打ち融けません、ある文学代表は神道を荒唐無稽の神がかりとまちがへ芸妓は娘と思ひました、上海の日本の方々は好意あるときは中国人はみな友と思ひ、機嫌のわるいときはみな敵と思はれてゐます。これはわれ／＼老人からみて一口に云へば教養がたりないのです。「中略」要するに日本文化界は中国を理解すること意外と浅く、中国文化界は日本を理解することに甚しい

ムラがあり、そして早く実行に移します。「中略」私は近頃の諸青年が努力する中日文化交流の『交流』には「ゆきちがひ」と訓をしたい齒痒さを持ちます。⁽³⁷⁾

南京中日文化協会は、設立当初、張資平を抱き込み、『中日文化』の編集を担当させるが、張資平は不穏な発言を繰り返した。上海中日文化協会は、戦争末期に、陶晶孫に白羽の矢を立て総幹事長に担ぎ上げるが、陶晶孫は、『上海の蜚』の中でも活写されているように、⁽³⁸⁾中日文化界の交流を冷ややかに見つめていた。中日文化協会は日本占領地区で「ゆきちがひ」の交流を積み重ねていったが、終戦とともに瓦解する。そして、そこに参加した中国人は、同胞の冷たい視線を浴び、漢奸として断罪される恐怖と向き合うこととなるのである。

注

- 1 高橋正「上海・一九四四——武田泰淳の場合」『待兼山論叢（日本学篇）』第三〇号、一九九六年十二月、一〇一―一八頁。
- 2 高橋正「上海の蜚」と中日文化協会」『月刊しにか』第一二巻第四号、二〇〇一年四月、一〇四―一〇五頁。
- 3 大橋毅彦・趙夢雲「上海中日文化協会研究・序説——現地新聞メディア掲載の協会関連記事一覧——」（非売品、二〇〇四年）。
- 4 松岡純子「張資平研究資料（2）文献目録」『長崎県立大学論集』第三五巻第二号、二〇〇一年九月、三五―六〇頁。
- 5 徐仲佳「張資平著訳年表」『新文学史料』第九七期、二〇〇二年一月、一七六―一八六頁。
- 6 「中日文化協会記事」『中日文化』第一巻第一期、一九四一年一月、一三六―一四〇頁。
- 7 「中日文化協会」『大陸年鑑昭和十六年民国三十年版』（大陸新報社、一九四〇年）四四二頁。

- 8 「中日文協上海分会昨挙行首届年会」『中華日報』、一九四二年一月三〇日。
- 9 「中日文化協会記事」『中日文化（日文版）』第一卷第一期、一九四一年三月、一四五頁。
- 10 注6と同じ、一四一頁。
- 11 「本会在漢挙行第一次全国代表大会紀辭」『中日文化』第二卷第三期、一九四二年五月、九一頁。
- 12 「中日文化賞を設定 文化日毎年四月二十一日の制定等 文化協会本会議で可決」『大陸新報』、一九四二年四月二三日。
- 13 「中日文化協会第二届全国代表大会記録」『中日文化』第三卷第二・三・四期、一九四三年四月、八二〜八四頁。
- 14 「文化提携の緊密化 中日文化協会全国代表大会終る」『大陸新報』、一九四三年四月四日。
- 15 谷川徹三「中国の思想問題——中日文化大会を顧みて——」『朝日新聞』、一九四三年四月二〇日。
- 16 武者小路実篤「和やかな空気 中日文化大会を顧みて」『朝日新聞』、一九四三年四月二二日。
- 17 武者小路実篤「支那旅行」『日本評論』第一八卷第七号、一九四三年七月、一〇九頁。
- 18 「多彩なる文化工作」『大陸新報』、一九四四年一月二二日。
- 19 「会務動態」『中日文化』第二卷第二期、一九四三年三月、一〇四頁。
- 20 「会務動態」『中日文化』第三卷第二・三・四期、一九四四年四月、九五頁。
- 21 「新中央政府樹立控へ 信念沸る大方針闡明」『大陸新報』、一九四〇年二月一七日。
- 22 鄂基瑞・王錦園『人生的失敗者——張資平』（復旦大学出版社、一九九一年）五六頁。
- 23 森三千代「日中戦争下の張資平——『和平運動』への参加過程——」『野草』第五六号、一九九五年八月、三七〜三九頁。
- 24 徐仲佳は、「折柳」を連載長編小説としているが実際は短編小説であり、また「東洋之巨星——新城博士」を張資平自身の文章としているが実際は翻訳であり、しかも正確な題名は「憶東洋之巨星——新城博士」である。
- 25 張資平「關於中日文化提携」『中日文化』第一卷第二期、一九四一年三月、四七頁。
- 26 星海「關於中日之學術提携」『中日文化』第一卷第三期、一九四一年五月、二一頁。
- 27 張声「日本第一流學者為何不來華講學」『中日文化』第一卷第五期、一九四一年九月、二四頁。
- 28 「本会出版組第二年度工作報告」『中日文化協会兩周年記念特刊』、一九四二年一〇月、八三頁。
- 29 注28と同じ、八二頁。

- 30 「張資平信」二通附『我之辯明』一份、『胡適遺稿及秘藏書信』第三四卷（黃山書社、一九九四年）三五三～三五四頁。
- 31 張資平は「全体主義在文化領域内之応用問題」（『中華日報』、一九四三年一月二八日）で、全体主義を鼓吹した。また筆者は未見であるが、森三千代は前掲の「日中戦争下の張資平——『和平運動』への参加過程——」の中で、張資平がおこなった汪政権への迎合的な発言として、「民族単体、民族集体及種族精神」（『大亞州主義与東亞連盟』第一卷第二期、一九四二年八月一日）、「強力政治之理論」（『大亞州主義与東亞連盟』第二卷第一期、一九四三年一月一日）、「反英美思想戦」（『大亞州主義与東亞連盟』第二卷第二期、一九四三年二月一日）などがあるとする。
- 32 たとえば前掲の鄂基瑞・王錦園『人生的失敗者——張資平』では、「鉄の証拠が山ほどある。張資平は紛れもない漢奸文人である」、張資平は永遠に歴史の恥辱の柱に釘づけられる（五九頁）と書かれている。
- 33 日中戦争時期の周作人の動向については、木山英雄が『周作人「対日協力」の顛末』（岩波書店、二〇〇四年）の中で、資料を精査し、綿密に跡づけているので、参照のこと。
- 34 「小竹文夫先生のこと」『武田泰淳全集（増補版）』第一六卷（筑摩書房、一九七九年）五七八～五七九頁、原載『史記Ⅱ』「月報五九」（筑摩書房、一九六二年）。
- 35 武田泰淳「汗をかく壁」『海』第八卷第四号、一九七六年四月、四七～四八頁。
- 36 「文化工作に本腰 学術委員会を結成」『大陸新報』、一九四五年一月二日。
- 37 「ゆきちがひ」の歯痒さ』『大陸新報』、一九四三年一〇月三日。
- 38 武田泰淳は「うら口」（『海』第八卷第六号、一九七六年六月、一四〇頁）の中で、阪東妻三郎主演の国策映画「狼火は上海に揚る」（一九四四年）試写会に参加した陶晶孫について、「明るい外部にでると、はたしてT氏は困ったように笑いだした。『これはどうもね。全然、わからないよ。中国人に観せたって』と、口に手をあてがって、いつまでもおかしがっている」と書いている。